

## 講 評

40回という記念すべき本展を迎えることができました。少子化や学校統合が行われる中で、昨年よりも多くの作品が出品されたことに驚きと喜びを感じています。第1回展は、昭和53年に町立角館美術館において「三市三郡児童生徒県南美術展」としてスタートし、その後「児童生徒県南美術展」に名称を変更しました。当初は、平福記念美術館で子供の絵を展示することについて疑問視する方が多く、理解を得ることが難しかったことが印象深い出来事でした。

世界の美術教育への時期は大きく変わってきました。戦後紹介されたハーバード・リードの著書『芸術による教育』は日本の美術教育者へ衝撃を与える程の一冊でした。私が驚いたのは「芸術活動をしている子供には絶対指導してはいけない」という、日本の図画工作の指導とは全く違う考えが基本になっていたのです。リードはチャーチル首相の信頼が篤く、その後ヨーロッパを中心に、フランツ・チゼック、ルドルフ・シュタイナー等の芸術による人間形成が実践されました。アメリカではルーズベルト大統領の芸術による国づくり（ニューディール政策）で、大国に成長した史実は芸術を再認識する機会となりました。これまでの「美しいものを感じとる、つくりだす」という適応表現や鑑賞力よりも「ファインアート（純粋美術）」に重心をおいた教育が注目されています。純粋美術が重視する、創造性、独創性は国の経済発展につながることをジェームズ・ヘイクマン教授が証明し、ノーベル経済学賞を受賞しました。最近では、OECD（経済協力開発機構）のエレン・ウィナー教授等が、芸術活動を各教科の基本にした『アートの教育学』が出版され、本県出身の篠原真子・訳（文部科学省調査官）で紹介されています。しかし、世界が注目した創造性や独創性は、日本人が習慣化している絵を描いたり、物を作ったり、鑑賞したりする受動的で優美な美術ではないことは確かです。

本美術展は40年前から今日の世界を先取りするように「創造性・独創性・個性」を育てる美術展としての実績を重ねてきました。未来担う子ども達の、頼もしい姿は全ての作品の中に感じ取る事ができます。全作品を代表して一例をあげてみます。



須川小5年 佐藤来咲 「白菜のたき」



中仙中1年 糸井優真 「キラキラ」

『白菜のたき』は、これまで見たことのない独創性が溢れています。黒色のコンポジション、アンフォルメル（不定形）の模様の工夫など、大人の現代絵画でも見ることがない程のすばらしい作品になっています。また、右図『キラキラ』も鏡のような反射面が、動く絵画で新鮮です。子供の絵は大人よりも優れているとマチスやクレーも言及し、今日の専門家が認めています。私は絵を見るとき、「自分より優れているかどうか」ということを基準にして見えています。毎日絵を描いていますので、既存の見慣れた構図や色には感動することはないのです。

秋田大学名誉教授 国画会会員 佐々木 良三